



公益大の国際化×教育

- 02_学生による海外体験をサポート
～欧州安全保障協力機構(OSCE)プラハ事務所
および在チェコ共和国日本国大使館訪問～
- 04_公益大の海外インターンシップ
モンゴル日本人材開発センターインターンシップ

研究紹介 1

- 06_「小さな大国」ニュージーランド
から学べること 教授 武田 真理子

研究紹介 2

- 07_日中比較文学
「華文俳句の可能性」 教授 吳 衛峰

教育活動

- 08_公益大の社会福祉士国家試験対策
－ Sato's Café －
- 10_キャリア開発センター公務員試験サポート
- 12_厚生労働省主催「令和の年金広報コンテスト」
厚生労働大臣賞受賞

学生による海外体験をサポート ～欧州安全保障協力機構(OSCE)プラハ事務所および在チェコ共和国日本国大使館訪問～



国際教養コース 准教授 玉井 雅隆



ー OSCE（プラハ）訪問と本学の教育プログラムのつながりは

今回のプラハのOSCE並びに日本大使館訪問の目的は二点ありました。一点目が、玉井が担当する「国際関係論」「多文化共生論」「基礎演習」及び「専門演習」において共通して取り上げる平和と民主主義の関係に関して、ゼミ生のみならず国際教養コースの学生のうち当該授業の受講生に、実地で学んでもらうことでした。

OSCEプラハ事務所次席大使のネムコバ（Alice Nemcova）氏は1990年からOSCE（当時はCSCE、欧州安全保障協力会議）にて働いており、またアーキストとして様々な資料に接しており、OSCE本部などでも何かあると問い合わせが彼女に来る、いわば「OSCEの生き字引」とでも呼べる方です。高位の国際機関職員である彼女にOSCEや前身のCSCEに関して様々な資料などを基にプレゼンテーションをしてもらい、質疑応答を行うことで授業内容をより深めてもらい、同時に卒業研究や将来の進路に関しても考えてもらおう、という機会でした。日本大使館訪問は、我が国がかつてより友好関係にあり、かつ民主化以降支援を行ってきたチェコと日本の関係を学ぶと同時に、大使自らお話しいただくことで、外交の最前線を知ってもらおう機会にすることが目的でした。

二点目には、プラハの街を見学することによって、今後の日本の街の在り方を考える機会を提供する目的です。プラハは数多くの欧州を覆った戦火から奇跡的に逃

れた街で、中世の街並みがそのまま残っている貴重な都市です。また、市街中心部に大型ショッピングモールと商店街が共存し、また街並み保存にも気遣うなど大変活気あふれる街です。そのような街を回ること、中心市街地の活性化などが大きな課題となっている日本の街づくりを考えることにも生かせると考えました。

ー 玉井准教授の研究とのつながりは

私が研究しているOSCE(欧州安全保障協力機構)は、アメリカ、カナダ、欧州諸国、旧ソ連諸国とモンゴルの合計57カ国が加盟国となり、日本も1992年からオブザーバー参加をしている、世界最大の地域的国際機構です。

そもそもそのOSCEは冷戦期の1975年にヘルシンキにて署名されたヘルシンキ宣言から始まるCSCE（欧州安全保障協力会議）がその前身です。ヘルシンキ宣言の起源は1954年のモロトフ・ソ連外相提案にさかのぼりますが、本格的に議論が始まったのは1968の「プラハの春」事件が契機でした。戦前、民主主義体制が根付いていたチェコスロヴァキアに、第二次世界大戦以降にソ連によって導入された共産主義、指令経済は、話し合いを重んずるチェコスロヴァキアの風土と合致するものではありませんでした。

そのために経済は低迷したのですが、それを打破するためにチェコスロヴァキア共産党第一書記であったアレクサンドル・ドゥプチェクが導入したのが「人間の顔を

した社会主義」であり、いわゆる「プラハの春」です。共産主義体制の非効率性を緩和するためにチェコスロヴァキアの伝統を導入しようとしたのですが、1968年8月にソ連軍を中心としたワルシャワ条約機構軍がチェコスロヴァキアに侵入、「プラハの春」は押しつぶされました。この様な共産主義体制の冷戦の悲劇を少しでも緩和するために、西側諸国が東側諸国と妥協をし、締結したものがヘルシンキ宣言でした。つまり西側諸国は東側諸国の共産主義体制承認と引き換えに、東側諸国民の人権尊重を約束させました。東側諸国はその約束を守る気はなかったのですが、CSCE再検討会議などで何度も東側諸国の違約を責め、最後には冷戦崩壊につながっていきました。

OSCEはこの冷戦の教訓を踏まえ、「包括的安全保障（Comprehensive Security）」の考え方をOSCE参加国内の規範として採用されています。これは民主主義体制は戦争を政策として選択しにくいことから、一国内の民主主義や人権の尊重が地域全体の安定につながるということです。私の研究も、この包括的安全保障の概念である「民主主義・人権の尊重と紛争予防」を主に研究しています。

プラハには冷戦終結後の1990年にCSCE本部が設置されましたが、その数年後には本部はウィーンに移転し、プラハにはドキュメント・センターが残りました。この

訪問メンバーを代表して、国際教養コース2年 中條 紘大さんに訪問について話を伺いました。

北東アジアで考えたい

国際教養コース2年 中條 紘大



ー 中條さんが参加した理由・目的は

「安全保障分野に興味がある。」ということが一番にあります。OSCEは、紛争に対して軍事的に解決を図るのではなく、小さな紛争予防のために何が出来るかを行っています。私自身が、平和のために軍勢力というような今までの考え方ではなく、別な視点で何が出来るのか。また、人権や経済的な面であったり、玉井准教授の研究分野でもある民族、マイノリティの観点であったり、そこから安全保障を考えてみたいということがありました。

紛争の原因が大国同士の間だけでなく、少数民族が原因になりうるということを講義で知り、その紛争解決を行っているOSCEの役割について自分でも知ってみたいと思いました。

ー 感想や気付きは

OSCEで話を聞いて、この仕組みを日本でも活かせるのか、北東アジアで何かできないかを考えていました。

加盟国の国力の差は関係なく、紛争が起こる前の小さ

ドキュメント・センター（OSCE Document Centre in Prague, DCiP）はCSCE時代からの各種会議などの文書、長期滞在型使節団などの報告書、各種事務所からの報告書などが所蔵されており、CSCE・OSCE研究には欠かせないセンターです。

私は2005年以来数度にわたりDCiPを訪問し、2007年には日本人としては二人目の研究員としてプラハに滞在しながら研究を行いました。私の単著『CSCE少数民族高等弁務官と平和創造』（2014年、国際書院）をはじめとした多くの論文は、このDCiPの所蔵資料やインタビューなどに基づくものです。



嶋崎郁在チェコ共和国日本国特命全權大使と訪問メンバー（左から）手塚麗羅さん(3年),湯本巴瑠季さん(3年),玉井雅隆准教授、嶋崎特命全權大使、外山楓さん(3年),前田小代莉さん(3年),平沼里穂子さん(2年),中條紘大さん(2年)

な段階で、常に対話での解決を模索する。このような仕組みを北東アジアで同じようにつくれば、今の様な中国、韓国との問題も解決できるのでないか、はじめは入りやすい話題、お互いに関心の高い、利害関係のある環境問題や経済問題から入っていくことにより同じテーブルにつけるのではと考えました。

北東アジアについての問題は、関係国、皆が同じテーブルについて、話し合っって答えを出す必要がある。答えはだせるとしています。



ネムコバ氏のプレゼンを聴く学生



OSCEスタッフと一緒に



モンゴル日本人材開発センターインターンシップ



モンゴル日本人材開発センターと本学のつながりは、2018年6月に開催されたモンゴル国防省・外務省共催の「ウランバートル対話」に本学の玉井准教授が招待されたことに始まります。ちょうど、当時二年生の学生が国際機関でのインターンシップを希望している旨の相談を持ち掛けられていたところでした。この会議でモンゴル日本人材開発センターの方と知り合い、この話をしたところ、インターンシップ受入の話がまとまりました。現在までのところ、2期6名を送り出し、この3月にはさらに3名を送り出します。

モンゴルがそれまでの共産主義経済を放棄し、資本主義に転換する過渡期、日本はモンゴルに様々な支援をしました。資金のみならず、企業経営のノウハウなど物心両面にわたり多額の支援を行ってきました。その関係もあり、モンゴルは日本に対して友好的です。

このインターンシップ・プログラムの目的は、日本の対外支援の最前線を実際に体験することで、本学の国際教養コースを含めた「国際化」というキーワードを実際に感じることです。特に授業で対外支援の話は触れますが、机上の理論のみならず実地にて理解を深めることを目的としています。また本学の位置する庄内地域は、環日本海経済圏の一部です。庄内地域の発展への貢献を考えた場合に、学生の目を日本海の向こう側、ロシア・中国やモンゴルに向けさせる契機になることは重要なことであろう、と考えます。

「知」というものは、単に座学で獲得するものだけではなく、その得た「知」を実地にて確かめることが重要な点です。学生たちにも、対外援助の第一線を体験することで、座学で得た知識を是非とも確認し、新たな「知」の獲得へと結び付けてほしいと考えています。

2019年8月に行われた2回目のモンゴル日本人材開発センターでのインターンシップには3名の学生（4年吉田裕亜さん、2年飯澤愛華さん、2年細谷優樹さん）が参加しました。参加した国際教養コース2年 細谷 優樹さんに話を伺いました。

私の初海外インターンシップ

国際教養コース2年 細谷 優樹



うことができました。

野浪さんは、JICAでモンゴルでの作業療法士を募集していることを知り「ちょっと応募してみようかな」と軽い気持ちで青年海外協力隊員に応募した。」と聞き、初めは野波さんの軽い気持ちというのに驚きましたが、考えてみれば、何かしたいという気持ちがあってJICAのホームページ（募集ページ）を見たのでしょうから、やはり協力隊員として海外で活動するには強い意志、気持ちは必要だと感じました。野浪さんは、実際の活動では言葉も難しく、生活環境に馴染むのも大変で「もういいかな」と冗談交じりに話してくれました。

今年が派遣の最終年ということで、「今後はどうするのですか」と聴くと「青年海外協力隊の活動によって、自分のリミッターが外れたと思う。日本やモンゴルとは限らず、世界中から自分が働ける場所を探したい。」と話されました。青年海外協力隊の活動は、日本では経験することができないほどの経験を積むことができ、人を一回りも二回りも成長させ、社会を見る目、自分の居場所を変えさせるとても有意義な活動であること、隊員の本音を最後に聴きました。

JICA職員の方からは、企画調査員の堀田さん、チーフアドバイザーの大川さんに話をきかせていただきました。堀田さんからは、私が「JICAへの就職を考えている。」と話す、開口一番「大変だよ」という言葉が返ってきました。実際に業務にあたっている方の言葉なので、その言葉には遣り甲斐以上の苦労があることを感じました。それでも、現地の人と一緒に、現地の人たちが自分たち自身で成長し続けられる社会を作るお手伝いが直接できることは話を聴くだけでもとても素晴らしく、苦労以上の遣り甲斐を言葉の中に感じました。

チーフアドバイザーの大川さんからは、日本のODA、国際支援の在り方について話を伺いました。大川さんの話の中で私が考えさせられたのは、国際貢献、海外支援のあり方でした。「国際支援は何も海外に行って、現地で行う活動だけではない。身近な国際貢献、海外支援の形はある。寄付活動などできることは身近にたくさんある。」「もっと広く、ゆったりと考えてもいい、支援に決まりきった形はない。」という話は、「国際貢献、海外支援は直接現地、現場に出

向いて行くもの。」という私自身の今までの考え方を大きく変えるもので、将来、これからの学生生活を考える上でとても参考になりました。JICA等が主催する日本文化の紹介・交流イベントJapan Festivalでは、浴衣の着付けのお手伝いをしました。本来であれば、私が浴衣の着付けをモンゴルの方にお教えすべきところ、着付け経験がないために逆に教わることになってしまいました。「自分が一番日本、日本文化を知らない。」と自覚させられ、これから国際分野で何かしたいと考えている私には、まだまだ学ぶことが多いと痛感させられました。

モンゴル日本人材開発センターでのインターンシップは、今日の日本の国際貢献、海外支援への理解を深める上で、大変貴重な経験になりました。インターンシップでしか経験できないこと、自分の将来を考えるととてもいい機会となりました。これから海外でのインターンシップを考えている方には、「是非行くべき。」と強く勧めます。考えるより行動すること。私は、今後も機会があれば積極的に留学や海外インターンシップに参加します。今年度一流体験合宿型研修プログラムでニュージーランドに行きます。帰国してからも酒田市の事業として継続して活動することになっています。この機会を捉え、自分自身の国際貢献、海外支援を考えたいと思っています。さらに、周りを巻き込んでの活動もしていきたいと考えています。



海外青年協力隊員 野浪さん



JICA企画調査員 堀田さん



JICAチーフアドバイザー 大川さん



Japan Festival での着付けの様子

「小さな大国」 ニュージーランドから学べること

地域福祉コース 教授 武田 真理子



ニュージーランドとの出会いは大学院の博士課程に進学してからでした。大学在学中に社会政策を専門とする恩師と出会い、大学院の修士課程までは基本的人権や最低限度の生活を保障するはずの祖国を失った難民と呼ばれる人の生活保障問題の研究に取り組みました。恩師の紹介もあり、ニュージーランドの社会保障制度について調べてみると、世界初の全国民を対象とした1938年の社会保障法の制定以降、国籍要件もなく、あらゆる人々の生活上のリスクに対して完全税方式で給付やサービスによる保障を行うセーフティネットのしくみを構築している社会であることがわかりました。それ以降、なぜそのようなしくみができたのか、どのようにしてそのような制度が運営されているのか、なぜ国民は同制度を支持し続けるのか、一方で制度の課題をどのように解決しているのか、という基本的な問いへの答えを探し続けて20年近く研究を続けています。

研究の過程では、行財政改革における社会保障制度の位置、東日本大震災と同時期に発生したカンタベリー地震の救援・復興期における生活保障システムの分析、複数の行政組織や官民の協働による社会保障・社会福祉制度の運営方法に関する分析など、日本の社会政策の課題の解決に資するべく、複数のテーマに取り組み、学術的・社会的貢献を目指してきました。研究を重ねるほど、ニュージーランドの社会保障・社会福祉の理念と制度設計の特徴を解明でき、また時代の変化とともに生じる課題や課題克服のための方策の分析からは日本の社会保障・社会福祉制度の改革への示唆を得ることができ、手ごたえを感じています。

現在は、科学研究費助成事業の支援を受けて、「ニュージーランド社会保障・社会福祉制度における

コーディネーション機能の分析」をテーマに研究を進めています。日本では1990年代以降、社会福祉基礎構造改革を柱とする社会福祉の理念の転換、少子高齢化、家族や地域社会の変容に伴い、「地域福祉」や「地域共生社会」の推進が叫ばれるようになり、福祉の在り方が根本から問われる時代に突入しています。その中で重要なキーワードとなっているのが多様化する個人、家族並びに地域社会のニーズに対して多様な制度や資源を組み合わせ、自立支援に取り組むための「コーディネーション」です。

本研究では、各種制度に基づいて多種多様な「コーディネーター」が乱立している日本の状況を踏まえて、地域コミュニティをベースとして官民の協働により一人ひとりの長期的な自立支援を実現しているニュージーランドの社会保障制度におけるコーディネーション機能の実態、及び日本の福祉まちづくりの実践におけるコーディネーション機能の分析を行い、社会福祉及び地域づくり分野の「コーディネーション」の理論化に貢献することを目指しています。

日本は社会保険中心の社会保障制度を運営しており、社会福祉制度については基礎自治体の役割が大きいことから、完全税方式で全国一律の社会保障・社会福祉制度を運営しているニュージーランドは参考にならないのではないかと意見が研究者からも指摘されてきました。しかしながら画一的な価値に基づく制度設計と運営方式が限界に達している今だからこそ、日本の社会保障・社会福祉の改革においてニュージーランドから学べるものが数多くあると感じています。庄内の地から研究の成果を発信して行けるよう尽力して参ります。



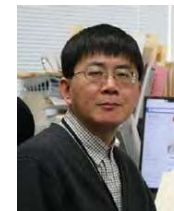
官民の連携により切れ目のない子育て支援・児童福祉に取り組んでいるニュージーランドの民間団体へインタビュー調査を行っている武田教授。左がニュージーランド最大規模の母子保健団体・Plunket、右がチルドレンズ・ビレッジ等の運営を行うStand Tū Māiaの職員を対象としたインタビュー調査の様子。酒田市の政策への反映を目指し、酒田市職員と大学同僚も同行した。

(6)



日中比較文学研究 「華文俳句の可能性」

国際教養コース 教授 吳 衛峰



私の研究分野は、いわゆる「比較文学」研究の中の日中比較文学です。比較文学という研究分野は、最初は一国の文学が他国文学から受けた影響についての研究、つまり「影響研究」として十九世紀のフランスで誕生された文学研究方法でしたが、その後、影響関係の有無を問わず、二つ以上の国の文学の比較研究、もしくは二つ以上の文化圏の文学の特質を比較する学問に発展されました。さらに、文学と絵画、文学と音楽のように、文学と文学以外の芸術ジャンルとの関係も比較文学の研究対象になりました。現在では、翻訳論や世界文学などが盛んに研究されています。

私の最初の研究テーマは、平安時代の和歌と漢詩との比較でした。九世紀末の『新撰万葉集』という小さな和歌集の中で、全ての和歌が漢詩の五言絶句に翻案されているので、平安時代の和漢文学の比較研究にとって絶好の材料です。その和歌がいかに漢詩に「翻案」されているのかを調べて、自分なりの結論を出しました。その後、同研究の延長線上のものとして、和歌と漢詩が並存する平安中期の『和漢朗詠集』や鎌倉・室町時代を中心に行なわれていた詩歌合の研究を続けました。

上記の研究をするかたわら、特に本学に赴任して以来、和歌や俳句などの日本古典韻文の中国語翻訳を翻訳論の手法に則って調べ始めました。和歌と俳句の中国語訳は、長い間、日中文化交流の手段として、もっぱら漢詩訳で行なわれてきました。しかし、漢詩訳では、和歌や俳句が受けた漢文学の影響のみが強調され、その本来の詩的特徴がなおざりにされる傾向があるので、私は漢詩訳の歴史的背景を調べ、その妥当性に疑問を呈して、言文一致の現代語訳こそ和歌や俳句の文学特質を表現できると主張しています。

日本の俳句は、二十世紀に入ってから、世界最短詩型としての独特な美学によって欧米から広く読まれるようになり、そしてHaiku (英語等：ハイク、「俳句」の音訳) もしくはHaikai (フランス語：アイカイ、「俳諧」の音訳) として様々な国で創作されています。現在は、科学研究費助成事業(科研費)の支援を受けて、中国語圏(中国本土、台湾、香港、シンガポールなど)における俳句の翻訳および中国語現代詩に対する俳句の影響を研究調査しています。

昨年(2019年)の12月に、科研費を利用して熊本大学で「華文俳句の可能性」と題する小規模なシンポジウムを行ないました。共同研究者以外、日本と台湾の俳人も招聘しておこなったもので、その報告は全国誌『俳句界』の3月号に掲載されています。



上：熊本大学でのシンポジウムの様子(吳教授は最前列右手)

次年度の科研費研究の計画としては、国際ハイクの季語に関する研究と並行して、台湾や中国本土の現代詩人にインタビューを行い、この数年のあいだ中国語圏で流行っている短詩型における俳句の影響を明らかにする予定です。

比較文学という学問は、そもそも「比較文化」の意味も含めていますが、私の仕事との関連で、文学の側面のみで紹介しています。

左：月刊『俳句界』(文學の森、2020.3)および、同誌に掲載された吳教授主催のシンポジウムに関するレポート(吳教授著)



(7)

公益大の社会福祉士国家試験対策 — Sato's Café —

地域福祉コース 助教 佐藤 昭洋
(国家試験対策担当)



Sato's Caféとは、今年度から新たに始まった公益大の社会福祉士受験対策企画の一つで、初めて国家試験の受験勉強を経験する学生に対し、「勉強方法」にフォーカスしたカフェスタイルの講座である。

社会福祉士養成課程が本学に設置されてから15年を迎える。本学の国家試験合格率（現役学生）は、毎年50%程度を安定して維持してきており、福祉の学部、学科ではなくコース規模でこの成果を出せていることは、学生自身の努力が第一にあるのももちろんのこと、学内外の先生方や大学の協力による受験対策サポートの手厚さによるところも大きい。この場をお借りして、御礼申し上げたい。

例年は、卒業生による合格者体験談（4月）、地域福祉コース教員によるアドバイザー面談（5月）、教員と外部講師による直前対策講座（10～11月）、壮行式（1月）など、公益大では多様な受験対策企画を実施してきた。

そして、これまでの本学の受験対策の強みをベースにしつつ、今年度より新たな受験対策システムも試み始めている。「実力判定模試→個別面談→キーワード講座、Sato's Café→リトライ模試→実力判定模試」のサイクルを通じた、「反復学習による知識定着と自信創出」である。

そのうちの新たな受験対策企画の1つ＝「Sato's Café」は、①国家試験とは何かを知る、②勉強方法を勉強する、③受験モチベーションの維持と向上を目的としている。本講座は、初めて国家試験に取り組む学生に対し、「何を勉強するか」ではなく、「なぜ、どのように勉強するのか」を刺激するという部分に特色がある。名称の由来は、①受験対策担当が佐藤になったこと、②カフェのようにリラックスできる雰囲気ですべて講座を展開したいというねらいがある（名付け親は日比眞一准教授）。

講座時間は60分で、参加対象者は「社会福祉士合格を目指す1～4年生」と学年オープンにし、また、ドリンク持ち込みOKにすることや、カフェの雰囲気を演出し、よりリラックスした環境を創り出すため、教室内にジャズやボサノヴァのBGMを流すなどの工夫を行っている。6月には23名、10月には17名の学生が参加した。

講座内容は、6月に①年間計画、②年間費用、③試験の仕組み、④国家資格と就職の関係性について、⑤反復学習法、⑥インプット⇔アウトプット法などの勉強方法を紹介した。10月には、①前日～当日の過ごし方、②直前学習計画、③認知特性、④過去問学習法など試験直前を意識した対策方法を解説した。

都会の大規模大学と違い、受験対策室や受験対策を委託できる予備校も近隣にない環境であろうとも、山形県唯一の社会福祉士養成校という誇りのもと、公益大から一人でも多くの合格者を輩出させるべく、本講座も学生に何らかの役に立っていただければ幸いである。



参加学生の声

“Sato's Café”のプログラムは、知識を定着させるための勉強法や学習テキストの紹介、試験に関する周辺情報、それぞれが学生との個別面談で抽出されたニーズをもとにつくられたコンテンツで構成されているのが、大きな魅力です。

また、Sato's Caféでは社会福祉士関連の進路情報を公開しています。必死に勉強して取得した“社会福祉士”という資格が将来どのような意味を持つのか、現場で役に立つのだろうかと不安に思うこともあります。求人票をもとにした就職情報、社会福祉士の位置づけ、社会福祉士の諸活動などを通して、資格をどのような現場で活かすことができるのか、取得後の具体的な将来像を思い浮かべることができます。

資格取得後の視野を広げてくれることで、国家試験合格へのモチベーション向上につながります。

地域福祉コース4年 澤内 康次



(Sato's Caféの様子)

Sato's Caféに参加し、国家試験の周辺情報と勉強方法などを学ぶことができました。

どちらも講義や試験勉強では知りえない内容なので大変わかりました。特に周辺情報については、国家試験受験にかかる費用から前日・当日の過ごし方まで知ることができました。

例えば、ホテルの宿泊費や交通費などの経済的な面も意識することができました。

また、勉強方法は書籍を参考にしながら詳しく、さらに試験問題の解き方も教えてくれ、おかげで勉強方法の不安も解消することができました。

Caféということで、リラックスした気持ちで参加できたことも印象に残っています。テーブルの配置やボサノヴァ、ジャズなどのBGMを流す工夫がされ、落ち着いて話を聴くことができました。

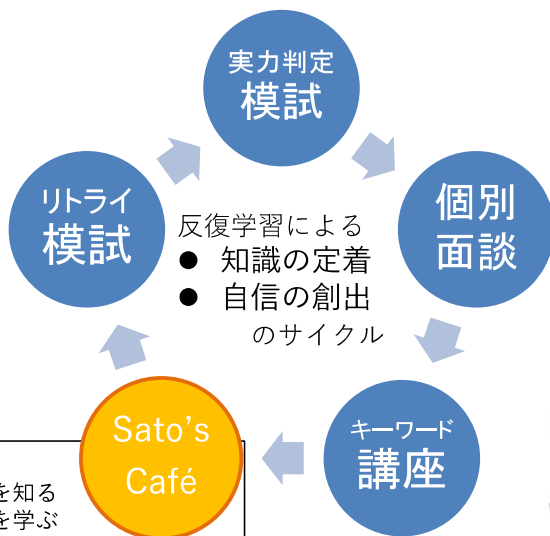
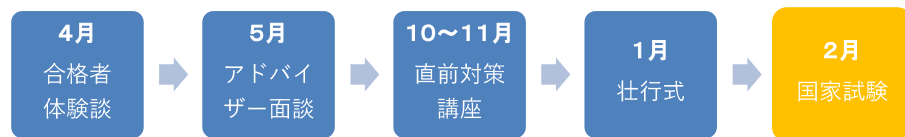
このプログラムで学んだこと・知ったことを活かし、国家試験合格のために今後も頑張ります！

地域福祉コース4年 齋藤 鈴



(左から、齋藤鈴さん、佐藤昭洋助教、澤内康次さん)

合格のための Sato's プロセス



- 目的
- ① 国家試験を知る
 - ② 勉強方法を学ぶ
 - ③ 受験モチベーションの維持向上

公務員試験合格は通過点

キャリア開発センター長
講師 松尾 慎太郎



今年度、開学以降最高の公務員試験合格件数を達成し、本学の公務員試験対策が実を結んだ。合格者の体験記に先立ち、本学の公務員試験対策の特色を紹介し、これから公務員を目指す学生へメッセージを送りたい。

本学の公務員試験対策の特色は、公務員試験に合格するためのテクニックの指導ではなく、公務員となって活躍できる人材の育成を目指しているところである。「公務員になるために何をすべきか」にとどまらず、「何のために公務員になるのか」を考えてもらうように心掛けている。それは、一次試験合格のための勉強が苦しくなった時、心が折れそうになった時には、自分を守る盾になるだろう。

また、二次試験の面接を合格するために重要な志望理由を強化し、自身の魅力を説得的に伝えるための武器になるだろう。

これから公務員を目指す学生には、是非、この「何

のために公務員になるのか」を自ら考え、本気で取り組んでもらいたいと思う。

公務員を目指す学生が集い、切磋琢磨できる「ホンキの学習室」も完成し、環境はより一層整った。しかし、「安定しているから公務員」や「親や先生に勧められたから公務員」という理由では、努力し続けることは難しいだろう。また、合格しても働いていくなかで立ち行かなくなる時代である。

キャリア開発センターでは、自ら考え、本気で公務員を目指す学生のサポートをし、公益の精神を持った公務員として活躍できる人材を今後も輩出していきたい。



「ホンキの学習室」室内

公務員合格者インタビュー (1)

【山形県 (行政) 合格】

暮らしやすい山形県を考えたい

政策コース 4年 阿部 圭祐
(山形県立新庄北高等学校出身)



一 公務員をめざした理由

中学生の頃から公務員を目指していました。当時は、どんな職種、業務内容かもわからずに、ただ漠然と周りが公務員は安定しているとか言っていたことが理由でした。

大学に入学して、新庄市のワークショップに参加する機会があり、そこでの市職員や県職員の方々の姿勢や考え方がすごく刺激になりました。県職員もしくは市職員として働くことが山形県や地域に直接貢献することにつながると考えるようになりました。山形県の一番の課題は少子高齢化だと思っています。その対策や、山形県が子どもから高齢者までが暮らしやすい地域になるにはどうすればいいかなどについて取り組んでいきたいと考えたからです。

一 公務員試験の勉強は

ネットで山形県の試験に出やすい問題などを検索することができ、出題傾向や何問出題されるかを調べ、勉強する科目をスケジュールリングしました。

日本史、世界史は、手を付けませんでした。英語も苦手で、ほかの科目に時間を費やすことにし、**出題が多く得点で半分近くをしめる、法律系の科目、憲法、民法、行政法と経済にしっかり取り組みました。**

勉強方法は公務員講座の問題集の頻出度のみを優先順位をつけてやりました。頻出度の高いものからやり進め、わからなかった問題に付箋をつけて、二回目は付箋を付けた問題を中心にすすめました。頻出度の低い問題は手を付けませんでした

公務員の勉強は、最初は順調に進んでいましたが、夏休みに中だるみ、なかなか勉強ができなくなり、これではだめだと自分に活を入れ、秋口からは必死に取り組みました。後半は公務員講座の問題集ではなく、他の問題集(過去問集)ばかりをずっとやっていました。

一 辛かった、不安だったことは

勉強自体とてもつらかった。つらかったですが、むしろ合格できない方がもっとつらいと思っていました。公務員の勉強は終わりが見えなくてつらく、民間に逃げたくなることもありました。民間に逃げて、公務員を諦めてしまうことが嫌でした。

模試で6割とれば合格も見えてくると言われていましたが、4割、3割をうろうろしていました。模試では、問題集にはない時事問題なども出てどこまで勉強をすればよいのか不安でした。模試の結果で不安になる度、

公務員合格者インタビュー (2)

【鶴岡市 (上級行政) 合格】

地域の発信者になりたい

政策コース 4年 佐藤 亮太
(山形県立鶴岡中央高等学校出身)



一 公務員を目指した理由は

高校1年生の頃から漠然ではありましたが、「地元のために何かしたい、地元の人と一緒に地域を盛り上げたい。」、それには公務員、市役所職員がいいと思っていました。大学生になって地域を調べてプレゼンテーションする授業があり、地元鶴岡を調べると、国内唯一のユネスコ食文化創造都市に認定されていたり、日本遺産にも登録されていたりと、自分が知らないだけで「凄いぞ鶴岡」というものがたくさんあり、正直恥ずかしくなりました。「もっと鶴岡を盛り上げたい、自分の地元、鶴岡を若い世代、子供たちにも知ってもらいたい、自分がその役割を担いたい、人と関わっていききたい。」と思い鶴岡市を目指しました。

一 公務員試験の勉強は

大学の単位は、3年の前期でほとんど取り終えました。勉強は公務員講座を中心に、講座のある時は講座の復習を兼ねて講座終了後2時間程度、講座のないときは大学の図書館などを利用して、8時間程度勉強していました。夏休みが終わるまではなかなか身が入らず、焦りもありました。さすがに夏休みが終わってからは「このままではヤバイ」と思い、がむしやりに頑張りました。

基本、勉強は問題集を解くことを中心に、頻出度の高いものを2回解いていきました。3回目に解けなかったものは、理解できなかったものはテキストなどで再度学習しながら解きました。問題集は試験本番までに4~5回まわ

キャリア開発センターの方に相談し、励まされ、どうにかモチベーションを維持することができました。

点数が伸び悩み、のまま全ての科目をやっても駄目だと思い、重要な科目とそうでもない科目とに分け、一日に3科目だけやるとか、何問やるとか決め、今日は3科目やると決めたら、手元にはその3科目だけ置いて勉強していました。

一 後輩へのメッセージ

公務員試験にこつはない。暗記科目が中心。一日にやる目標を決め、自分でやると決めた科目をいかにこなすか、相手のとの戦いというより、自分との闘い。自分の中でどれくらい理解できるか、他人の人がこれくらい問題をこなしているかとか、このくらいやらなければとかは関係なく。自分が自分の方法で勉強を進め、どこまで理解できるかだ。やらなければ悔しさが残る結果となる。

しました。もともと文系でしたので、理系科目は苦手、出題の少ない物理、化学は早い段階で捨てました。勉強のスケジュールは基本として1章ごと10問をやったら、次の科目というように決めていました。

一 辛かったこと、不安だったことは

4年の春の段階でも模試でD判定以上をとったことがなかったので、正直挫折しそうになりました。

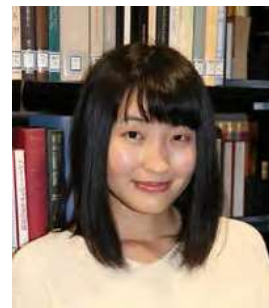
「夢は口にださなければ実現しない。」といわれていたので、「鶴岡市役所に入る。」と早い段階からいろいろな人に話していました。なので、模試でD判定でも、いまさら辞めることも逃げることもできない状況で、やり続ける、結果を出すしかありませんでした。そのために必死に勉強を続けました。

実際の試験では、1次試験の合格発表から2次試験まで期間があって、酒田市は9月だったのですが、鶴岡市は10月だったので、だめだったらどうしよう、民間もなくなるのではとても不安でした。模試の結果や2次試験対策など不安になるたびにキャリア開発センターに相談に行っていました。

一 後輩へのメッセージ

諦めない事が大事、本気で公務員を考える人は民間を考えることはせず、あきらめなければ夢は叶う。他人に自分の夢を語るべきと諦めない。逃げそう、挫けそうになる自分を引き留める歯止めになる。

公務員志望ではなく長井市志望



政策コース4年 前司 美南
(山形県立長井高等学校出身)

一 公務員を目指した理由は

私は、とにかく地元の長井市に戻ることを考えていました。

地元長井から若者が減っていく中、一旦外に出た私が戻れば私の分だけでも若者流出は防げると考えていました。なので、長井市で、何か長井市の皆さんの役に立てる仕事、就職を考えていました。そう考えると、私は公務員志望ではなく長井市志望です。

長井市役所を受験したのは、職場としての長井市役所がとてもよかったからです。それは、インターンシップに行った時の職場の雰囲気がすごく良かったこと。職員の方が市民のこと、市のことを常に第一優先に考えていたことが理由です。

このインターンシップで、私の中で長井市役所が第一志望になりました。

一 公務員試験の勉強は

公務員試験に備えるため、2年次までに単位はほとんどとり、3年次は集中して取り組む環境をつくりました。

本格的に試験勉強に取り組み始めたのは2年生の春休み、3年生になる直前でした。試験勉強は、受験を決めた長井市の試験科目が教養のみなので、少しでも早くと思い3年になる前に始めました。

勉強の計画は、ある程度大きくたてて、週、日ごとに体調とか他の予定などと、見直ししながら、今週はここまでやるとか、ここまでやったら休みとか進めました。2年の時にわからずにスルーした問題は、3年の時に講座の先生に訊いたりして克服しました。

具体的なスケジュールは夏休みまでは、主要科目の数的処理、文章理解、社会科学だけを、夏休み以降は物理以外の全科目に手を付けました。

勉強時間は2月から6月までは一日7時間、7月から9月までは8時間、9月以降は多い時で11時間。私は朝方なので朝5時間やって、夕方から6時間というスタイルでやっていました。公務員試験の勉強は長期戦なのでうまくメリハリをつけないともたないと思い、週一日は必ず休みをとると決めていました。休みの日の楽しみはなんといっても温泉。温泉が本当に大好きで、楽しみ、息抜き、ストレス発散でした。ここまで勉強したら温泉に行く決めて勉強していたほどで、車で行ける庄内の日帰り温泉はほとんどまわりました。

一 不安だったことは

長井市役所は一次試験で6割取ることが必要。受験案内にもしっかり合格ラインが6割と書かれていて、他大の友人は58点でダメでした。本当に6割必要なのだ実感しました。私は、正直6割取れた自信がありませんでした。模試でも6割取れたり取れなかったりで、本番でとれるかとても不安でした。受験後は、ギリギリかダメかだろうと思っていました。2択の問題で回答を迷うところがあり、その出来で決まるとしていました。気持ち的にはダメの気持ちが強かったので、合格したときはとてもうれしかったです。

苦しいときにお世話になったキャリア開発センターの職員の方には本当に感謝しています。

一 後輩へメッセージを

一次試験の勉強、対策を誘惑に惑わされずやってもらいたい。やらないと落ちる、でもやれば絶対受かる。学力に自信がない人でも、夢があれば、なりたいたいものがあれば、強い心があれば、とにかく誘惑に負けず目標に向かって諦めずやってもらいたい。一次試験を突破できなければ何もできない、始まらない。思いが大事。

「令和の年金広報コンテスト」厚生労働大臣賞受賞



本学の阿部公一教授が担当する「プロジェクト型応用演習(国民年金加入行動啓発プロジェクト)」において、教授指導のもと学生グループ(2年)が作成した「広報媒体(動画)」が厚生労働省主催『第1回 令和の年金広報コンテスト』の「厚生労働大臣賞(最優秀賞)」を受賞し、加藤厚生労働大臣から表彰されました。

広報誌 『公益大ニュース』 第3号 2020.2

E-mail : koho@koeki-u.ac.jp

〒998-8580 酒田市飯森山三丁目5番地の1

TEL:0234-41-1111 FAX:0234-41-1133

<https://www.koeki-u.ac.jp/>

 東北公益文科大学
Tohoku University of Community Service and Science